

獣と少年の話である。

角が朱色で目は漆黒、随分大きな真っ黒の、闇のような獣が村にやってきた。

近くに寄ったらあつという間に喰われてしまうだろうと、鳥も草もぎよつとして身を避けるから、獣の回りにはいつも丸い空間ができて、何でも吸い込んでいるように見える。歩くブラックホールのような得体の知れない生き物を目撃したと、誰もが急ぎ足になって、「恐ろしい獣がやってきた」と触れ回った。

西の空は、燃え尽きていく。

もう半分くらい地平線に溶け出してしまった光の玉がうらうら揺れているその真ん中で、ふらりふらりと歩く獣の姿がぼつりと浮かんでいた。獣の輪郭はぼんやりして、うらうら夕陽と一緒に揺らめいている。表情は影となってよく窺い知れないものの、疲れているらしかった。霧を含んだ土は、大きな足に押されて、しつかり足跡を残している。

獣の姿が近づいてきた。けれども、いつもぼーっと呆けているとからかわれてばかりの小さな石ころは、これまたぼーっと呆けていた。

（ホウケ、あぶないよ！早くしないと、獣が来るって！）

そこら中を飛び回っている揚羽蝶が言う。

（空はすごいね、夕方になるとすっかり金色になる。太陽の顔も、上半分と下半分じや、随分と心持ちが違うもんだなあ）

石ころは空を眺めたまま、眠たくなるような調子で言う。

（そんな事言っている場合じゃないよ、早くしないと大変だよ、私は遠くへ逃げるからね）

揚羽蝶は上下にバタバタ忙しく羽ばたきながら、藍の深まりゆく方へ去っていった。

今度は道の端から声がする。

（ホウケ、獣がやって来るよ！潰されてしまうよ、早く逃げなくては）

露草が身を躍らせながら叫んだ途端、ぎゅつ、ぎゅつ、と、獣の足音が近づいてきた。

（獣？ 獣というのは、一体どんなものを言うんだい？）

石ころは、相変わらずゆつくりとした調子のまんまである。

（ああ、もうダメだ、きつとお前は粉々にされるか、宇宙まで放り投げられるか、どちらかだろう、見ていられないよ！）

露草はついに獣の姿を見つけた。小石に降りかかる災難はよっぽどひどいに違いない、目の前で起こるだろう惨劇などとても見ていられやしない、と、長い手で目を覆い隠した。

足音は加速するように迫ってきた。それなのに、石ころはまだ呆けていた。：いや、本当は、身を避けようとしていたのかもしれない。

ついに大きくぎゅつと一つ音がしたと思うと、石ころのすぐ横に、真っ黒な獣の足が勢いよく飛び込んだ。石ころは、頭上に降ってきた土の塊を見て（あ）と言った。

露草は、目を隠していたと思ったら、手の隙間から様子を窺っていて、こちらは大き

く（あつ！）と声をあげると、今度は本当に目を閉じた。

その瞬間だった。

獣は、道端の露草へ向かって、まるで伐採された大木のように、ぱつたんと倒れた。

大地から身体が飛び出してしまったかと思うほどの大きな衝撃に、反射的にぱつと目を開けた露草は、すぐ目の前にある毛むくじやらの大きな黒い玉、いいや、獣の頭のとつぺんに目を丸くした。石ころも、やつと驚いたような顔をする、隣に誰かが倒れているのを見つけた。石ころは、どこか具合が悪いのかと倒れている者を心配し、のそのそ一生懸命に転がっていった。

その間には、露草が大笑いをして、隣の草に（呆けたホウケにつまずいて転ぶ、まぬけな獣）と繰り返してつぶやいた。

すると、それを聞いた草が、隣の草に言って、その草も隣の草に言って、殆どあつという間に、山の麓の草まで広まって、いつしか、みんなの笑い声は生ききもののような波となつて、あつちへこつちへ、寄せては返した。そのすぐ上を、乾いた風がびゅうつと吹き抜けていく。

（大丈夫ですか？どこか痛くありませんか？）

石ころは、やつと獣の顔の近くまで辿り着くと、途切れる息を抑えながら言った。すると、獣は目を閉じたまま溜め息をつくように言った。

（私には、ひどく硬い皮膚があつて、たくさんの毛がありますから、大抵怪我なんかしませんよ）

（でもさつきから起き上がりませんから、どこか具合でも悪いのではないかと思うのです）

（いいえ、大丈夫ですよ）

そう答えてはいるものの、獣は目を閉じたまま動かない。

どこかで草の笑い声を聞きつけて舞い戻ってきた揚羽蝶は、石ころに心配されている獣、起き上がることもできない獣を見つけると、上下にはためきながら（呆けたホウケに急かされる、起き上がることもできないひ弱な獣）と、文句を組み立ては反復し、早速みんなに触れ回ろうと、また忙しく去っていった。

獣は、村に来てからあつという間に恐ろしい獣になり、あつという間にまぬけな獣になった。

2

もう光の帯も消えかかりそうになった空に、一羽のカラスが飛んでいた。

遠くの樫の木で獣の噂を聞いたカラスが、獣の元へと飛び立っていた。

（やめな、やめな、いくらまぬけな獣と言っても、石じゃなけりや、食われてしまうかもしれない）道中、皆、口々に騒いだ。仲間のカラスにも、蟋蟀にも、強い調子で引き止められたが、鳥は獣にひとこと声をかけたくて、真つ直ぐに空を飛んだ。

カラスは昔、孔雀になりたかった。

（一度あれを見たらもう虜さ、玉虫色の羽が何枚もあつて、それを使って光を反射して、色を自在に操るんだ）

カラスは、孔雀の美しさを発見した自分こそが、本当のことを知ったような気がした。誇らしかった。毎日のように仲間にも自慢をしては、孔雀を眺めに出かけていた。

ある日、カラスは大きな心臓のリズムに乗せて、孔雀に話しかけた。(あなたの羽は素敵ですね)

すると、孔雀は聞こえないふりをした。

それから、カラスは、自分はどんな時も(ふり)をしない、と決めた。

追い風になった。

羽を休ませながら風に乗っていると、遠くに獣らしき黒いものが見えてきた。噂通り闇のように真っ黒な姿に、一瞬不安が過ぎたが、さらに近づいてみると随分だらりと倒れている様子が目に入って、何だか少し可笑しくなった。噂通り、まぬけなのかもしれない。

カラスは、獣のおへその上にちょうど良く着地すると、つんつんとお腹を突いてから言った。

(まったく、いつまでそうしているんだい、それじゃあまぬけになっちゃうぞ。一体全体、どうしたっていうんだ)

(起きないからまぬけになるんじゃないさ、もともとまぬけだから、石ころのホウケに躓くのさ!) 露草が笑いながら言った。

(カラスさん、実はね、いやきつとね、この方は、私を踏まないようにしてお転びになったのだと思います。大丈夫だとおっしゃいますが、さつきから起き上がらないのです) 石ころは、カラスへ向かって真っ直ぐ声を投げかけた。

(そうか、それはどうしちまったかね)

石ころとカラスが、獣に耳を澄ませていると、まぶたがゆっくりと開いた。

それから獣は、太い腕を重々しく上げ、振れた爪の目立つ人差し指で自分のお腹の上に停まっているカラスを指差して言った。

（まいったな、その黒はうそものじゃないか）

（ははは、こいつはうそものじゃないさ、どうだ、黒くてかつこいいだろう、お前さんと同じ真っ黒の体さ）

カラスはおどけてみせたが、獣は押し黙ってしまった。

石ころとカラスは目を見合わせた。カラスが首を傾げながら獣の様子を窺っている横で、石ころはふとカラスから目が離せなくなった。カラスの羽が灰色になっているような気がする。驚いて目をぱちぱち瞬いてみたが、やはり違う。

（カラスさん、体が、何だか灰色になっているようです）

カラスはそう聞くと驚いて、自分の羽を見てまた驚いた。今度は、瞬きをしないように一箇所に目を凝らしてみると、ついに羽が白くなっていくのを見た。

（こりや、一体全体、どうしたんだ…）

みるみるうちに全身真っ白になった。驚いて羽を広げても閉じてても、真っ白だった。

（こいつは大変だ、獣さん、あんたがやったのかい、ホウケ、ご覧よ、すっかり白くなって
いる）

（ええ、カラスさん、すっかり白くなっています）

カラスは何度も体を見回して、それからしばらく虚空を見つめてから呟いた。

（白くなった…）

（カラスさん、黒も素敵でしたけれど、とつても白が似合っています）

石ころが陽気な声を出すと、カラスは、どこからか風の音を聴いた。

お尻からぞくぞく震えがきた。

大きく一つ羽ばたいてみると、獣のことも、仲間のことも、色々なことを忘れて、体の中の、今までどこにあったのか、見たこともない暗闇の世界に小さな光を見つけた。すると、お腹にずうつと詰まるように何かが集まってきた。

ついには、それが体に収まりきらなくなって空へ一気に噴出するかのようになり、鳥は大きく高く翔け上がった。

何度も何度も、上昇しては旋回した。

深まりゆく藍色の空を、白い羽が斬る。

いつしか震えがおさまると、空をゆっくりと見渡した。

白いカラスは、すうつと空気を吸い込むと、雲の欠片をくわえて、獣の元へと降りて行った。

(どうもありがとう。これで、どうか元気を出して下さい)

カラスは、ありがとう、と、もうひとつ言うと、思慮深い眼差しを残して飛び立っていった。

獣は、胸に置かれた雲の欠片を手にすると、それをしばらく眺めてから、となりにいた石ころにぐつとはめ込んだ。それから、重々しい体をやっとなと起こしたと思うと、また、ふらりふらりと歩いていった。

硝子球の中に、白い蒸気が凝縮された雲の欠片は、石ころの体の中で弾けた。

それは目が眩むような真つ青な空を作り、澄み渡る白い雲をいっぱいにつくた。石ころは、自分を抱きしめて喜んだ。

露草は、目の前で起こった一切のことを、今度は誰にも言わなかったから、波は起きなかった。

白いカラスは、櫛の木に戻ると、もうどこにも仲間が居なかった。心許なく寂しかったが、夜が耽るまで泣いてから、藍の中、北の空へと飛び立つていった。その様は、月であり、星であった。輝く羽が瞬くたびに、夜は更けていった。

獣は、もはや立っているのもやつと、足を引きずりながら歩いていた。そして、道の外れに二つの切り株を見つけた。

3

少年は、木に登って夕方と夜の境目を探していた。以前、境目を探すのに気を取られて、木から落ちてしまったので、時折気をつけながら。

沈みゆく夕陽を眺めていると、真っ黒な獣が皆に避けられながらこちらへ歩いてくるのを見つけた。少年は最初、一足先に夜が歩いてきてしまったと思った。

獣は、しばらく立ち止まっていたかと思うと、切り株に落ちるようにして座った。まるでその瞬間に地中深く根を生やしてしまったかのようなだった。

少年は、木から降りて、早足で駆けて行った。

（どうしたんだい、もう夜も更けてくるから家に帰るんだよ、皆が君を避けたりして、ろくな思いをしないだろう）

（いえ、もう家はどこか忘れてしまいましたし、それに、避ける者が多いですが、私からすれば、寄ってくる者も多いんですよ。それが、大変なんです。これは、私にかかられた、所謂呪術でしような、自然と色んなものを吸い取っちゃうようになってるんです）

(なんでまたそんな風になってしまったのかい)

(そいつは何とも言えません、いつからこうなったのか、もう思い出せなくてね、まあ、いつの間にか吸い取っちゃもうようになったんでしょう、きっと昔、そんなことをする誰かを見たのかも知れませんね)

(しかし、そんな無理をしていると、その内に死んでしまうよ、もうすっかり疲れてい
るじゃないか)

獣は、少年を見た。

(ああ、なんとお優しいのでしょう、こうなってしまったことを気にかけてくれた者は、
どこにもおりませんでした、私は大丈夫ですよ、大丈夫です)

(そんなことはないだろう、あまり我慢ばかりすると、涙が出てくるものだよ)

すると、獣は泣いてしまった。

日が沈めば、いつの間にか暗くなる。

星は、静かに息づいている。

宇宙へ延々と続く夜空の下、小さな切り株に座った獣と少年が、ぼん、ぼん、と浮か
び上がっていた。遠くには、夜に沈みきった山々が連なり、幻灯は気まぐれに明滅を
繰り返しながら蛍のように空を泳いでいる。

今日の夜は、どこか明るかった。自然の息吹が充足し、光に満ちた夜がある。まるで

生命が大気に融解したかのように、—気温は体温のように感じられ、遠くには異国の船や祭り火が見え—生氣に包まれているような、そんな夜。

獣は、慎ましく呼吸を整え、ゆつくりと話し始めた。

思い出せる限り話をした。少年は、静かに耳を傾けていた。

話しをするうちにすっかり夜が更けた。獣は、少年を家に帰して、自分は早く行かねばならないと、小さな焦りを感じた。その時だった。

気がつくと、少年の腕や足の毛がどんどん長くなっている。

腕と足が、あつという間に毛で覆われ、肌はみるみる内に黒く、硬くなっていく。

獣は、驚いて声を上げた。

（ああ、知らなかった、知らなかった、こんな事になるなんて、なんてことをしてしまったのだろう、私はもう行かねばなりません、いや、貴方さまがどうか離れてください、そうしないといけません）

少年の肌が黒く、硬くなっていく。

足と手はずんぐりと大きくなり、褐色に染まった爪は伸び、振れていった。

目は、黒く濁りだした。そして釣り上がっていく。

獣は、その様子を前に、何もできなかった。ただ心臓の音が鳴り響いた。しばらくすると、少年と相反するように自分の毛は薄く、皮膚が白くなってきたことに気がついた。

少年は、自分の身に起こる変化をそのままに、獣が少年へと還っていく様を見つめながら言った。

（あなたは誰のせいにもしたことがなかったのですね、随分苦労したことでしょう、だから、いいですよ、あなたは僕に変わって、家に住んだらいいのです、何もありませんが、中は壁に囲まれていますから、あなたを守ってくれることもあると思います。）

獣は、自分の涙を抑えなければ、少年がどんどん獣になっていくとわかっていたのに、涙を止めることができなかった。

わんわん泣いた、まるでこの星の海と目が繋がっているように。

いつしか、獣は美しい少年の姿へと還った。

そして少年は、すっかり獣と化し、臭いをも放ち始めた。

獣は、美しい少年となり、少年はおぞましい獣となった。

美しい少年となったかつての獣は、目の前にいる少年を見て、己の姿を思い出した。

少年の思いやりに触れて、自分が獣になった理由を思い出した。

自分は少年であって、獣になったのだ。そして、獣となった自分は疲れ果て、この斯くも優しき少年にすべてを吐き出してしまったのだ。

（どうしたら元に戻るのでしょうか）

（大丈夫、あなたがこうして、僕になったのだから、きっといつか、僕も誰かになるかもしれない、だからきっと、大丈夫ですよ）

獣は、ゆつくりと立ち上がると、歩いていった。

(待つてください)

少年が振絞った言葉は、声には及ばなかった。

獣はゆつくりと歩みだした。一度だけ後ろを振り返ったが、その表情からは何も窺い知ることができなかった。

少年は、遠ざかってゆく獣を見つめながら、自らが厳しい旅路にいたことを知った。

そして、自分の無力さに、更に泣いた。

4

獣は、夜通し歩いた。

どこへ向かったらいいかも知らずひたすら歩いていると、多くの者に避けられ、また、多くの者に出会った。

最初に出会ったのは、座り込んでいた蛇と、落ち込んでいるカササギだった。

彼らを目にした時から、切られるような胸の痛みを覚えた。そのうちに、彼らは目が生き生きとしていった。しばらくすると次第に体が重くなり、激しい疲れに襲われるようになった。

出会いを重ねる度、痛みを覚え、それらが蓄積するように体は重くなった。獣は、誰にも会いたくなくなってきた。しかし、また、会う。

しばらくすると、あの獣であった少年の姿が、脳裏に浮かび上がってくるようになってきた。歩を進めるたび、想い浮ぶ回数が多くなってきた。このままいくと、少年のことを

怨んでしまうような予感がした。過ぎ去っていくはずの心象風景が、何度も繰り返され、脳裏に留まる時間が長くなっていく。

全身の力が抜けていった。

獣は、ついに少年を憎んでしまいそうになり、目を閉じて倒れ込んだ。

このまま動かずに目を閉じていれば、誰かを見ることもなく、これ以上、苦しみは増えないだろう。そうすれば、この弱い自分も、どうにか過ぎ去ってくれるだろう。

自分が、獣に思えてきた。恐ろしい。

少年は、意識を静寂に保とうと一点に集中したかった。

一点は何でもよかった。

だから、また、空の境目を探した。

突然、お腹に何かがとまった。

（ああ、お元気でいらつしゃいましたか。いつかと同じですね）

獣が目を開けると、白いカラスがお腹の上に止まっているのを見た。以前会ったと言うが、記憶にない。

悪いがどちら様かと尋ねると、

（なんと、険しい道のりの中、記憶をなくされたか）

カラスはそう言って、光る涙をぼろぼろ零した。

それからカラスは、獣と出会った時のこと、その後の自分のことを話した。

話を聞いている間、また、あの少年の姿が浮かんだ。

でも、目を閉じる必要はなかった。

カラスは言った。

（あれから、あなたを一日たりとも忘れたことはありません。いま私は、あなたのようにならなうに黒くなることができないか、試行錯誤しているのです）

獣は、空へ向かつて微かにほほ笑んだ。

空は遙か高く、翡翠の音が響き渡る。

完